No.29／1992.6.5

CYRニュース No.29

幼い難民に未来を

発行：幼い難民を考える会　〒160 東京都新宿区南元町6－2　TEL.03-3353-9947　FAX.03-3353-9739

4月7日、カオイダンキャンプから初めての帰還バスが出発した。

カンボジア難民の帰還と私たち

昨年10月、パリで調印されたカンボジア和平協定を受けて、タイ・カンボジア国境に暮らしていた33万人あまりのカンボジア難民がカンボジアへ帰り始めました。国連の計画によれば、来年初めに予定される総選挙までに、帰国を希望する人びとをカンボジアに帰し、その後の自立援助を図った後、カンボジア全体の復興援助に力をいれるとあります。現場で見る限り、これまでキャンプで長年暮らしてきた人びとの思いは複雑です。国内の戦いが本当になくなるのか。自力で食べ、病気にならず、安全な暮らしが本当にできるのだろうか。賊が出没し、水も足りないと聞く。地雷の被害の話はよくあるし、土地を耕したところで米が充分取れるようになるか、それもわからない。暮らせなければ、またタイへ逃げていくしかない。難民の一人はこう話していました。同じ不安は、カンボジアの復興をなんとか実現させたいとする、国際社会にもあります。

とはいえ、大がかりな帰還計画は、期待と懸念の声の渦巻くなか動きだしました。国に帰った後、人びとはこれまでに払った犠牲に

加えて、政治に利用されるような事態を果して避けられるのでしょうか。戦いが止み、人びとの帰った先が安住の地となるのでしょうか。新しい土地で暮らしを切り開き、定着できるようにするためにはどうすればよいのでしょう。

キャンプで、さまざまな仕事に携わっていた人びとが、どのように技術や能力を生かせるかは、カンボジアの復興にとっても大きなテーマです。人びとが持ち帰る技能はどう生かされるのか、またそれを活用しうるようなダイナミックなシステムは確立されるのでしょうか。例えば、「幼い難民を考える会」（CYR）の保育センターで働くカンボジア人保育者の多くは、カンボジアの村であれ、町であれ、帰ったところで子どもの世話をする仕事をしたいと望んでいます。一方、カンボジアで小規模な仕事を始めたばかりのCYR

撮影／飯田照明

（カンボジアではCYK＝Caring for Young Khmer）は、プノンペン郊外とその近県の村で、母子保健や保育を通して子どもの環境改善をめざしていますが、それ以外の地域での活動の青写真はまだできていません。タイに近いバッタンバンに帰る保育者はこれを知っており、先の見通しがないため、帰還の日を目前にこのところ元気がないのです。

国連の資金難、土地確保の難しさ、地雷撤去作業の遅れなどが指摘され、帰還計画の前には大きな問題が立ちはだかっています。帰還者家族を乗せたバスが、キャンプから去る場面が日常化すればするほど、これらの人びとの再出発への可能性が問われるのです。

キャンプで難民の自立に結びつく活動の意味を絶えず問い続けてきた私たち。12年の間、幼い子どもたちの安全や成長のあり方を、キャンプから出られない人たちと共に考え、できるだけ心豊かな生活環境をめざし、人間的な配慮を優先してきたこれまでの歳月。カンボジアに帰った後も、子どもの健康を守り、心の安らぐ環境をつくりたい、子どもの世話をしたいという保育者の声を聞くとき、私たちはあらためて、仲間が増えた喜びをかみしめます。

今、保育センターを囲んで立つ何本もの樹。枝に子どもたちを遊ばせ、葉陰で眠る赤ん坊の頬をなでる緑の風。12年前、幼い難民が園庭に小さな穴を掘り、植えた苗木の数々。カンボジアに帰った保育者が、定住先で次の世代を育むような苗を植えられるよう、また母たちが誇る美しい絹地を織り続けられるよう、CYRは今、カオイダンキャンプでの最後の仕上げとして、将来、カンボジアの人たちが自らの環境づくりに専念できるよう、仕事の青写真を描いています。（編集部）

現場からの帰還報告

――タイ・カオイダンキャンプから

カンボジア難民の帰還が3月30日に始まりました。タイからの帰還者約33万人のうち、CYRが活動をしているカオイダンキャンプにいるカンボジア人は、1万4000人（3月末）。しかも、ここは国境の避難地と違い、外国に定住を希望した人たちのキャンプです。帰還についての意見や反応が他のキャンプに比べて異なる部分もあるかもしれません。カオイダンキャンプで、CYRの12年にわたる仕事の最後を引き継いだ高田美江子が報告します。

2月10日（月）

カオイダンキャンプでの帰還予備登録が終わりました。帰還登録しない人たちに対しては、強制的ではないが最終的にはほかの人同様移動しなくてはならないし、遅くなると配給などの条件が違ってくる、とUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）は、説得を続けています。

CYRで働く人は約84%が事前登録を済ませました。最近は気持ちが吹っ切れたのか、表情が明るくなってきました。以前は農業などやりたくないと言っていた若い人が、帰還に意欲的で、祖国の将来に期待している様子です。

一方、独断で自主帰還する人や様子を見に帰る人は減りません。帰るとき、案内料として片道600バーツ（約3300円、15歳以下は無料）をタイ兵士に支払ってポイペト（カンボジア側の国境の町）まで入り、そこから別のガイドに頼

国連のカンボジア難民帰還計画　1992年2月発表

タイ国境にいる約33万人　（7か所のキャンプから何十人かずつ）

⇩

タイ国境：集合地（サイト2、サイトB，サイト8、カオイダンキャンプ）に1泊

⇩

カンボジア：受入れセンター（6か所）に1週間程度滞在。住宅用資材と2か月分の食糧を受け取り、希望地に行く。

⇩

希望地：収穫が得られるまでの約1（2ヘクタール）年間、配給が受けられる。

★毎週平均8500人から1万人を帰還させる。

★帰還の終了は1993年春に予定されている総選挙前。

んで移動すると聞きました。CYRでも、3月半ば、踊りと歌の上手な保育者が、子どもを連れてプノンペンへ向かいました。その後の消息が気になっていましたが、4月にプノンペンのCYKの事務所をたずねてくれました。

3月13日（金）

第三国へ向けて、約200人が親族ケース（定住した家族の呼び寄せ）として旅立ちました。行き先は、アメリカ。これは難民定住ではなく、移民で最後の機会になるだけに、帰還計画実施を控えて、住民は動揺したようです。

◆タイ商人2人が国境で現金を奪われた上、殺害された。（バンコクポスト）

3月14日（土）

◆夜、カンボジア人が、カオイダンキャンプの隣村で、村人15名を人質にして、1人1万バーツ（約55,000円）の身代金を要求。賊は重装備をしており、現金、家財道具を奪った。

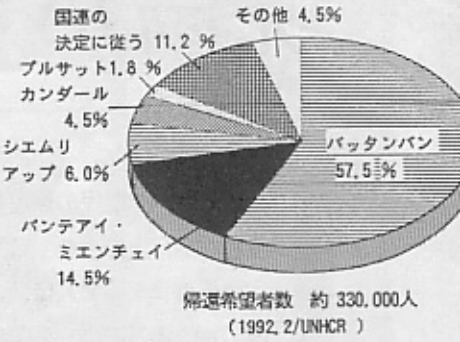
カンボジア人ゲリラがタイの村人を襲う事件が、国境付近で多く、仕事を失った兵士が、タイの村人や帰還者を脅かすと心配されています。（バンコクポスト）

3月23日（月）

UNHCRが、キャンプ放送で帰還第1陣が3月30日（月）サイト2より約600名出発すると伝えました。（文書は4月に入ってから住民にわたされた）以前から、住民たちはボイス・オブ・アメリカ（ラジオ放送）や新聞などで、帰還実施を知っていましたが「いよいよ」といった感をもったようです。帰還者に、カオイダンからの2家族8名も含まれていました。30日は、式典もあるため、各キャンプからサイト2に集合します。

◆国境の避難村サイト8で、武装した賊が裕福な地区に押し入り、タイ軍と交戦。カンボジア人2人が死亡、子ども1人が負傷、タイ軍側も1人負傷。

帰還希望地



帰還希望者数　約330,000人
（1992.2/UNHCR）

3月30日（月）

サイト2で「カンボジア本国帰還式典」が行なわれ、タイ人スタッフ全員と私（高田）も参加しました。午前9時、子どもたちによる歌と踊りの披露に始まった式典は、カンボジア側、タイ側からのお礼やあいさつと進み、約1時間半後、タイ政府から帰還者へのプレゼントとして、歯ブラシ、クローマ、トイレットペーパー、インスタントラーメンなどが入った袋

＜集合地への移動について＞

―― UNHCRの発表

タイ政府、DPPU、国連との協力で進行。出発予定の7日前に各自に知らせる。準備は2日前に集合地のUNHCR事務所に行き、家族手帳、またはUNHCR家族データ表を持参し、印を押してもらう。その時、所持品を入れるビニール袋を受け取る。

＜前日＞

2　出発日は、乾燥パックの朝食が配給される。
3　集合地と移動中は、水が配給される。
4　車の酔い止め薬は希望者に出発前配給。

＜集合地では＞

1　手続きがすんだら、各家に移動する。
2　同じバスに乗る家族は、同じ家に入る予定。
3　各バスのグループリーダーを選出。リーダーが助手1人を選ぶ。
4　リーダーは、全員バスに乗り込んだか確認する。

◆はタイの村、国境でのできごと。

が渡され、幕を閉じました。11時には、UNHCRカンボジア帰還計画実施第1陣 526人がバス14台に分乗し、大きな荷物はトラック7台に積み、まず国境の町アランヤプラテート（タイ領内）へと出発。帰還者は、前途に不安を抱きながらも、期待も大きく、涙する人はほとんど見られませんでした。

数人に話を聞くと、帰るのを楽しみにしており、うれしいといった返事でした。詰めかけた報道陣は、帰還者の半数以上の約 300人。異常なお祭騒ぎです。

この喧騒とは別に、地雷撤去、道路整備、安全地帯獲得、コンポントム県でのプノンペン政府とポルポト軍の衝突（12ページの関連記事参照）など、これから国内で生活できるかを問う以前の、安全の保障がないままの帰還であることが気にかかります。現場にいて、キャンプ住民全員に希望を持って祖国に帰ってほしいと願う者の心境は複雑です。しかし一方、無理を承知で帰還計画を実施しなければ、本国帰還は遅々として進まな

1　各家族、午後1～2時に集合地に行き、手続きをする。家族手帳、UNHCR家族データ表を持参。

2　袋に入れた所持品は、入口でチェックを受ける。

3　集合地で1泊する。

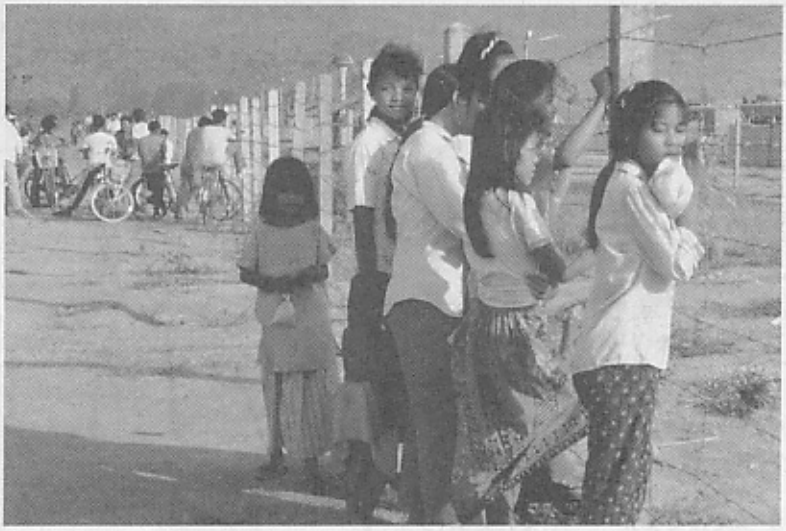
4　出発カードを受け取る。（宿泊予定の家番号、バス、トラックの番号が記入されている）

＜食べ物・水＞

1　集合地に来た日の夕食は各自持参。

帰還者のプロフィール　（（UNHCR資料より）

年齢層	92.6%　44歳以下
	47　%　15歳以下
男女の比率	ほぼ同じ
平均家族数	4.4人。
出身地	60%が北西部の4県（バッタンバン、バンテアイ・ミエンチェイ、シエムリアップ、プルサット）
祖国での職業	大部分が農民
避難した年	3分の2の人が1979年末～1980年
出身県の記憶	ほとんどない



いだろうことも理解できます。

私の幸運は、大きな歴史の変動、「帰還の日」を目撃できることです。問題が山積しているにもかかわらず、帰還第一陣のグループを目の当たりにすると、感無量です。

帰還者の大部隊は、昼には国境の橋に到着。ここでも簡単な式を行ないました。その後、一行は国連の車に先導されて、カンボジアのバンテアイ・ミエンチェイ県にあるシソフォンの受入れセンターへと向かいました。

4月1日（水）

4月7日だけの帰還者名簿が貼りだされました。49家族 198人の名が見られます。ついに、カオイダンキャンプの集合地からも、カンボジアに帰るバスが出発します。CYRの「希望の家」保育園の子どもたちも数人含まれています。いっしょに新年パーティーを楽しめないのが残念です。

4月6日（月）

カオイダンから初めてバスが出発する前日。帰還者と住民を、真新しい鉄条網がさえぎり、2つの世界をつくりあげています。有刺鉄線越しに、手を握り合ったり、食べ物を手渡したり、また、遠くからただ目と目を交わす姿に、帰還後の不安を見る思いがしました。

それでも、天秤棒を担いだおばさんたちが、パン、お菓子、果物、アイスクリームなどを売る姿は何とも頼もしいものがあります。

4月7日（火）

初めてのカオイダン発の帰還の朝、半ば予想し、半ば予想できなかったことですが、報道陣は見られず、忘れ去られた感じです。

祭りは終わった！　知り合い同士、別れを惜しむこともできないまま、国連の車に先導されて、11台のバスが出発しました。

◆国境のサイトBで大火事が発生。約 500世帯が被災。

◆タイのタプラヤで、またしてもカンボジア人の賊（7人）が出現。2軒の家を襲い、タイ人と兵士4名、カンボジア人1名が死亡。

4月13日（月）

◆約 100名のカンボジア難民、僧侶などが、カンボジア国境の町ポイペトからプノンペンへ向けての442キロを平和行進した。

4月17日（金）

お正月（4月11～17日）の間休んでいた本国帰還の再開をUNHCRが発表。カオイダンキャンプの集合地からは21日、22日に出発。CYRのスタッフからも初めて本国帰還者が出ます。

7日にカオイダンキャンプの集合地から帰還者が出発してから、CYRのどのスタッフ、保育者も自分の帰還も目の前に迫っていると感じ始めているようです。しかし、1週間滞在予定のカンボジア内の受入れセンターに2週間以上も留まっている、土地確保がむずかしい、コンポントムでの激しい交戦など、さまざまな情報が飛び交い、人々は不安を募らせています。お正月以降、CYRで働く人たちは再び、暗く思い詰めた様子になってしまいました。UNHCRにカンボジアの詳しい正確な情報を伝えてくれるよう頼んでいますがお正月後、まだミーティングは行なわれていません。

4月21日（火）

◆サイト2で雷と嵐のため約3,300世帯、14,000名が住む場所を失い、少なくとも2名の死者が出た。

◆一方、CYRの宿舎のあるアランヤプラテート一帯は、ひどい干

ばつで4台の給水車が朝夕村人に水を配給。

4月30日（木）

カンボジアのシソフォンからプノンペンへ、初めて鉄道を使っての帰還が行なわれました。これは5月から8月の雨期には道路が使えなくなることを想定しての試みとのことです。特別仕立ての「シソフォン急行」は612人を乗せ、早朝3時に出発、12時間かけて、340キロの旅を終えたと報道されました。プノンペンへの帰還を希望していた人でしたが、市長が、「これ以上路上生活者を増やせない」と受入れを拒否。数日の滞在後、西へ約30キロ離れたコンポンスプー県へ移動されたと聞きます。

5月1日（金）

◆サイト2で大火事発生。約1,500家族が焼け出され、幼児が死亡、3名が負傷。水不足と強風、住民が隠し持っていた武器、弾薬が大火事の原因となった。

5月12日（火）

UNHCRは、カオイダンの全住民に対して、帰還計画の変更について話をしました。内容は、帰還者用土地が大幅に不足しているため、3つの方法のいずれかを選んでほしいというものでした。

①農業用の土地がほしい人 ―現在土地がないので、UNHCRが確保するまでキャンプで待ってほしい。ただし、土地は希望地とは限らず、ほかの県になる可能性が高い。

②家を建てるための土地のみ支給を希望する人には、建築に必要な材料と道具、および、家財道具、1年分の食糧を支給。

③土地の支給を希望しない人には現金大人1人につき50ドル、子ども1人につき25ドル（以下現金と略）、家財道具、1年分の食糧を支給。（プノンペンの場合は6か月）

というものでした。住民の多くが動揺を隠せず、不満を表していました。

1週間ほど後、選択肢はさらに3つ増え、UNHCRは図を使って説明を始めています。

④商売を始めたい人には、1家族に1セット、必要な道具（大工、電気屋、自転車修理等）と1年分の食糧を支給。（プノンペンの場合は6か月）

⑤すでに仕事が見つかっている人には現金と3か月分の食糧を支給。

⑥カンボジアに住む家族、親戚の許に帰る人には現金と6か月分の食糧を支給。

今たくさんの人が帰りたくないと言うのを耳にしますが、それぞれどう思い、どうしてよいかわからないというのが実感でしょう。私も、この人たちの立場なら同じだと思います。しかし、私たちは明らかに部外者です。しばらく、みんなの気持ちが落ち着くのを見守るつもりです。

「どの方法を選びますか？」と6つの選択肢を図解したもの。

カオイダンキャンプでのCYRの活動

CYRの技術訓練の教室は、UNHCRの要請により、織物4月、洋裁5月で生徒の受入れを終了しました。これ以降は帰還がまだのカンボジア人スタッフで、織物・洋裁は8月まで、木工は10月まで運営します。なお、保育園は子どもがいれば、12月まで、CYRスタッフで保育を続ける予定です。

態勢ほぼ整った カンボジアでの活動

カンダールの保育園で保育指導するCYKのヒムワリー（左）。

昨年12月に、カンボジア政府との契約が結ばれCYK（Caring for Young Khmerの略称。1991年にできたCYRの1部門。カンボジアでの活動を行なう。クメールはカンボジア人のこと）は本格的にカンボジアでの仕事に取り組んでいます。プノンペン市内に事務所を開き、プノンペン郊外と近県を活動の対象に定めました。仕事を軌道に乗せるため、東京事務局から山崎尚枝（1月28日～2月8日）、峯村里香（3月8日～25日および4月22日～5月6日）、高橋あつ子（4月30日～5月6日）が相次いでカンボジアに行き、その態勢づくりをしました。そして4月22日からは、CYRの長年の会員だった奥山卓司が、新たに在カンボジアスタッフとして加わりました。

子どもと母親の生活環境向上にむけて

前号でお知らせした活動候補地（プノンペン郊外のミエン・チェイ地区）は、その後、カンボジア政府の要請でほかの団体に譲ることになり、新たにプノンペン西部郊外のダンカオ地区サムロンクロム村を選びました。

CYKプノンペンスタッフのスパーパ・オンサクルとオラタイ・サートゥギグンは、この間、プノンペン教育局とWACプノンペン（カンボジア女性協会のプノンペン支部）の協力を得るため働きかけてきました。新たに選んだ地域は、村人の生活が貧しく、保育施設がありません。近くに帰還者受入れセンターがあり、村には3つ小学校があるので、そのどれかを活動の拠点にできます。ここで母親と子どもの生活環境向上をめざして

1）家庭が抱える様々な問題の解決にむけて「家庭相談員」を養成。栄養、健康管理、保育などについての知識の普及にあたる

2）家庭相談員による地域の子どもと母親の生活環境調査の実施

を第1段階として行ないます。また、調査結果を分析し、補助給食、予防接種など、必要とされるサービスを次の段階で行なう予定です。

村の第1次調査

カンボジア語が堪能なオラタイは、1月20日、プノンペン市内に最も近い集落にあるテッカポンヨ小学校をたずね、関係者の協力を要請しました。まず、子どもたちの状況を知るため、8人の教師に質問項目を渡し、生徒の家庭環境のデータ集めを始めました。その結果、妹、弟の面倒をみるため、生徒の多くが学校を長期に休んでいることなどがわかりました。

サムロンクロム村の様子をオラタイと、東京事務局・山崎の報告書から引用します。

「サムロンクロム村は、11以上の集落から構成されている。テッカポンヨ小学校のある寺には大きな池があり、村人はここから水を汲み使う。ほかにもいくつか池はあるが、乾期には水不足が深刻になる。また、池の水を煮沸しないで飲む村人が多いことが、衛生上の大きな問題になっている。

村人のほとんどは農業を営んでいる。灌漑設備がないため一期作で、家庭で食べる米が自給できる程度、あるいは、それも足りない程度の収穫量という。家畜はカンボジアの人にとって大切な財産であり、この村でもたくさんの牛や豚が放し飼いにされている。牛は農耕、車を引くときなどによく使われる。米づくりのほかは、スイカや野菜を畑でつくる。また、村にたくさんある砂糖ヤシからジュースをとったり、ユニセフの援助で作られたかまどで煮込み、砂糖をつくり売っている。また、タバコや、お菓子などを少しずつ仕入れて小売りしている女性もいる。男性の中には、バイクでタクシーの仕事をする人もいる。池で魚がとれるので、食費はそれほどかさまないにしても、現金収入は少なく、生活費として十分とはいえない。学校に行っている子どもが2人いるある村人の場合、授業料は1人20リエルしか払えない。（この村の小学校の授業料は年間 500リエル。しかし払えなければいくらでもよいことになっている）

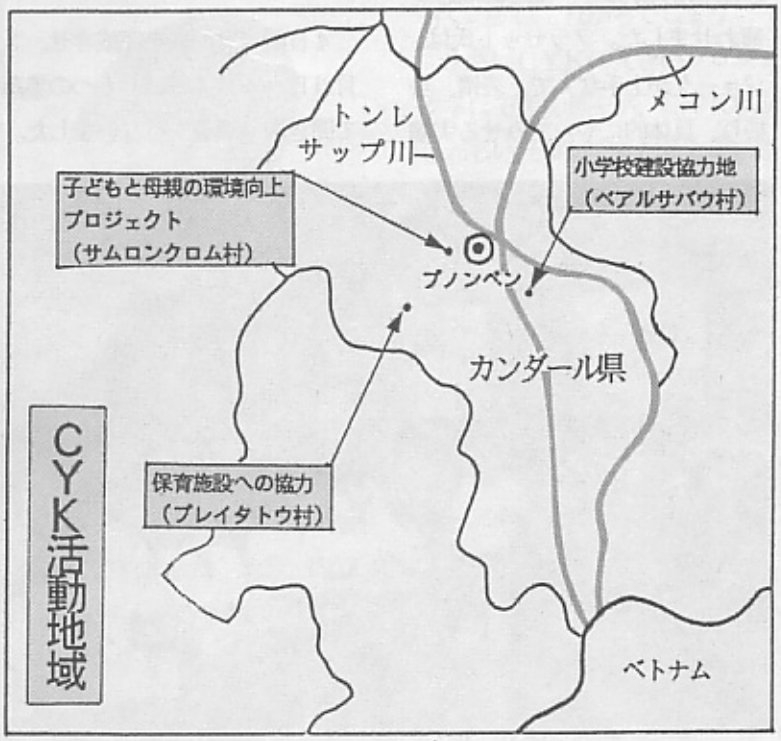
村の中でも、ある程度の貧富の差はあり、裕福な家は高床式だが、ほとんどの家はニッパヤシと竹でできていて、家財道具もほとんどなく、わずかな鍋、釜がある程度。電気はない。」

村の生活環境調査終わる

3月には、村の家庭と子どもの状況調査をするため、まず調査員の養成から始めました。

以下は、東京事務局長・峯村がカンボジア滞在中の報告です。

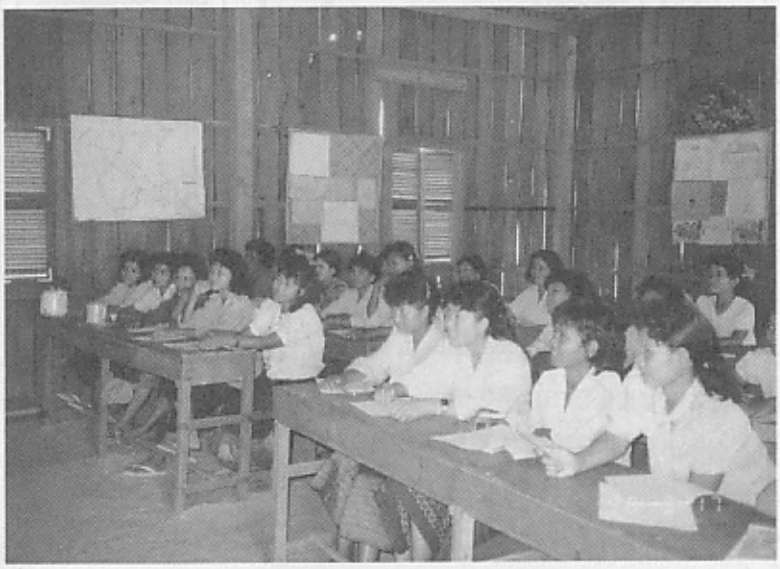
「オラタイがWACプノンペン支部を通じて『母親で、文字の読み書きができる、5～8年程度の教育を受けた人』という条件で、調査員志望の女性を探しました。しかし、サムロンクロム村では、教育を受けた人は少なく、選ぶのが難しかったようです。選ばれたのは、母親15名<内未亡人7名>、独身8名の計23名。



生活環境を調査するためには、まず調査員の養成が必要だとアドバイスをしてくれたのは、PADEKという民間団体で働く、タイ人のノラセット氏です。カンボジアでは、文字を読めない女性が多く、また読めても意味が理解できない人が多いので、調査員が質問の意味をよく理解していないと調査ができないというのです。彼はユニセフやカンボジア女性協会で女性の地位向上と開発のトレーニングを担当したこともあり、養成指導では定評があります。ノラセット氏はオラタイの友人で、無償でCYKに協力してくれています。『なぜCYKのトレーニングに参加したか』というノラセット氏の質問に、参加者の多くが、保育と子どもの健康について学びに来たと答えた人が多く、関心の高さを窺わせました。ノラセット氏は、ジョークが上手な人で、表情、身振り、具体的にやってみせる実演がまた楽しく、女性たちはクスクス笑っているうちに、子どもや家庭の問題について自然に学んでいきます。みな熱心でこのうち数名は自分の意見をはっきり述べ、将来、こちらの働きかけ次第で、よき家庭相談員、または保育者として育っていくことと思います。

トレーニングの内容は、調査の目的にあった質問をするために、調査員がいくつかのグループに分かれて、自分たちで考えた項目をチェックしあい、完成させるものです。必要なときだけ、CYKが考えた案を参考にしてアドバイスをします。質問を受ける側と調査する側に分かれて、模擬家庭調査も行ないました。会場は、午後授業がないテッカポンヨ小学校の教室を使わせてもらいました。」

4日間で質問表を完成させ、3月21日～4月4日に、6つの集落で聞き取り調査を行ないました。



現在、その分析をしているところですが、結果の一部を右のグラフにまとめました。

調査にあたった23人の中から、10人（17歳～40歳、既婚者8＜内未亡人6、母親7＞、独身2）を家庭相談員の候補者として選びました。

CYKの新しいスタッフ

4月22日には、東京、タイでの研修を終えた奥山卓司が、在カンボジアスタッフとして、同時に、CYKの代表として着任しました。また、タイの病院や難民キャンプで看護婦として6年間働いた経験をもつピムワリー・ニッサワッタナーナンが5月5日から、新しくCYKのスタッフに加わりました。6月1日からは、14年の保育経験と海外での活動経験を持つ、野村美知子が東京での研修を始め、秋頃、カンボジアで働く予定です。

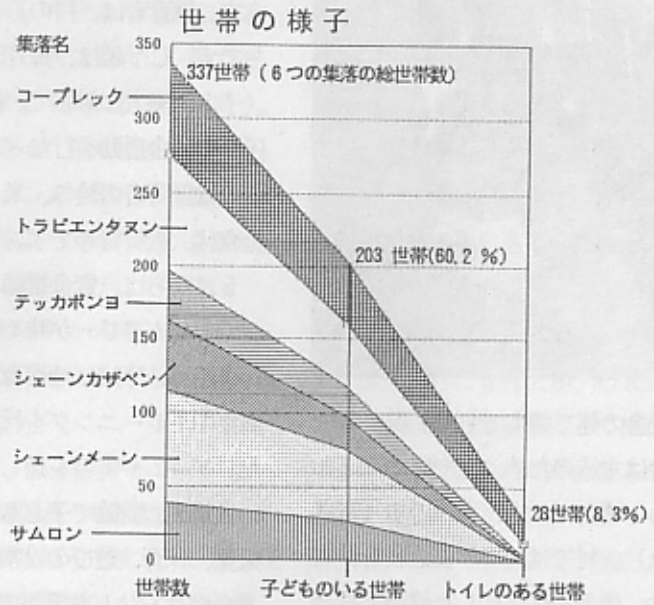
以下は、プノンペンの奥山からの報告です。

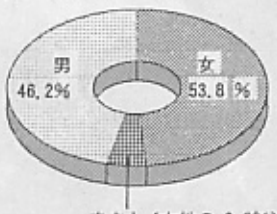
「3月に実施したサムロンクロム村の調査のデータの分析は、SHARE（日本の民間団体。国際保健協力市民の会）が協力を申し出てくれました。相談しながら、分析をすすめたいと思います。

しかし、分析には時間がかかるので、結果が出るまで、各家庭がどのような問題に直面しているか面接調査しました（5月18日～23日）。その結果、健康に関するこ

サムロンクロム村の生活環境調査結果（一部）

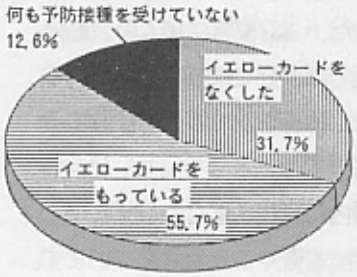
（6つの集落）





未亡人（女性の 9.2%）

6つの集落の人口　1710人（0 ～ 6歳 350人）



※イエローカードは子どもの成長と予防接種を記録するカード。出産時に助産婦からもらう。

とが大きな問題になっていることがわかりました。原因として考えられるのは、①病気になってもお金がないため医者にかかることができず慢性的な病気になっている。②未亡人以外にも、夫が兵役中、あるいは離婚などのために、女性が世帯主となり家計を支えているケースが多い。③家族計画の知識がなく、子どもが多く、家計を圧迫している。④衛生設備、衛生の知識が不足している、などです。

このような状況のなかで、CYKは、保育施設の開設、村にある診療所の活用（建物は村人が5、6年前に建てたが、ほとんど機能していない）、技術訓練などの可能性を現在、模索、検討中です。

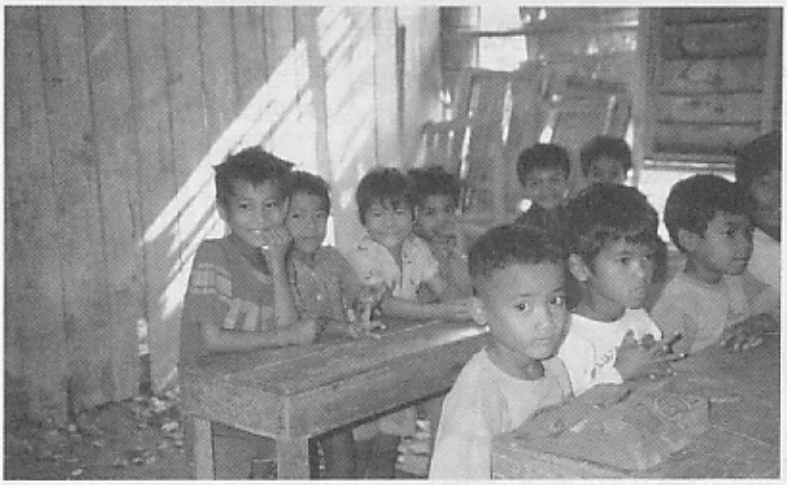
在カンボジアスタッフの声

奥山卓司

4月下旬、プノンペンに着き、空港から市内へと走る車のまわりを過ぎていく風景は、熱帯の明るい色の中で、人びと、車、自転車、バイクなどに溢れて、これから新しく作られていく国の活気を感じさせてくれました。地雷、内戦、危険……日本で持っていたイメージと少しちがった国がそこにありました。もちろん、多くの危険があり、この国がどのような方向に行くのかはこれからでしょう。

小さいCYKに大きいプロジェクトはできませんが、CYKにふさわしい仕事ができたらと思います。小学校建設の業者を決めるときなど、外務省、県、建設委員会などの利害がうずまき、政治的かけひきも必要とされます。しかしばか正直で、冗談をすぐ真に受けてしまう僕にとっては、もっとも苦手な部分です。そういう場面で、非常に鋭い推理と判断力を見せてくれるのがピムワリーです。

「しっかり型」と「楽天のほほん型」で、いいコンビになると思います。（元公務員）



また、337家族に10人の家庭相談員では十分ではないと思われるので、様子をみて増員を検討する予定です。

村内に建物を借り、CYKのセンターを置くことも考えています。WACプノンペンも了承済みで、これを村内活動の拠点としたいと思っています。」

学校建設協力地の変更

当初、カンボジア外務省から建設協力を要請されたのは、タケオ県の小学校でした。ところが、アメリカの援助団体が小学校建設だけでなく、地域全体の開発を行なうことになったため、変更を求められ、承諾しました。

新しい建設協力地は、プノンペン市から約10キロ、カンダール県キーンスバイ地区ベアルサバウ村です。ベアルサバウ村には現在1つ小学校があり、お寺の敷地内の第1校舎と、村の集会場を使った第2校舎に分かれています。CYKが協力を求められたのは、第1校舎の建て替えでした。現在の校舎は木造のため、壁や屋根はほとんど壊れて、穴だらけです（写真上）。村では、小学校建設を目的に、僧侶を代表にした建設委員会をつくり、建て替えを計画しましたが、資金不足のため中断していました。生徒数は約700名、教師は20名です。

いくつかの業者から見積もりをとりましたが、建築資材の値上がりで、建設には約500万円必要とわかりました。5月16日、カンダール県から紹介された業者と契約を結びました。工期は、5月16日から9月12日の約4か月。17日には建設開始のセレモニーを朝から行ない、外務省の副大臣、カンダール県知事なども出席しました。

保育施設への協力

カンボジア女性協会、ユニセフとの共同事業になるカンダール県プレイタトウ村の保育施設は、今年1月から保育を始めました（写真右）。保育者4名が、月曜日から金曜日の午前7時から夕方5時まで、35名前後の子どもをみています。保育者は、村の若い女性たちです。CYKは、毎月350ドル（子ども35人に対して。約47.000円）の資金援助を行なっています。内訳は保育者の給与、米100キロ、給食代、教材費等です。

5月からは、資金援助だけではなく、ピムワリーが時々保育園に行き始め、半ばには保育者の4日間集中トレーニングを行ないました。ゲームや実習を通して、あるいは講義、討論で子どもの発達、栄養、保育、遊びの役割、おもちゃの作り方などを学んでいくものです。トレーニング終了後のテストでは、保育者がよく理解したことがわかりました。

小学校補修への協力

CYKが、子どもと母親の環境改善プログラムを実施する、サムロンクロム村のテッカポンヨ小学校から、床をコンクリートに改修

するための資金協力を求められました。現在、床が土のため、ほこりがひどく、子どもの健康にもよくないとCYKは判断し、協力を決めました。費用は約30万円です。5月11日から工事が始まりました。

テッカポンヨ小学校は建物が3棟、8教室あり、1年生から5年生まで（カンボジアは小学校は5年間）の437人が木曜と日曜を除く毎日、朝7時から11時まで通っています。

国内避難民への援助

話はさかのぼりますが、UNTAC（国連暫定カンボジア行政機構）がカンボジアに入る（3月15日）数か月前、国内での戦闘が激しくなり、国内避難民が急増しました。

カンボジア赤十字は、プノンペンから北へ約110キロ離れたコンポントムの避難民に対しての緊急援助の協力を各国の民間団体に呼びかけました。CYKは、避難民の状況を知り、援助の必要性を確認するため、オラタイが、OXFAM（イギリスの民間団体）、HOLT（アメリカの民間団体）に同行して現状視察。（3月2日～5日）道路事情が非常に悪く、2泊しなくてはなりませんでした。このほか、バッタンバン、バンテアイ・ミエンチェイの避難地も視察しました。以下はプノンペンに当時滞在していた峯村からのファックスによる報告（3月20日）です。

「CYKが、カンボジア赤十字から援助を依頼されたコンポントムは、最も状況が悪いようです。カンボジアの中央に位置し、ポルポト軍がここを占領できれば、他県にも行きやすくなるため、激しい戦闘が現在も続行中。道路が封鎖され、UNTACも手前で待機しています。2月末現在、コンポントムの避難民数は501家族。オラタイが同行した3月上旬、OXFAMは緊急援助物資を持って出かけましたが、戦闘のため、配ることができませんでした。オラタイ滞在中、毎晩、砲撃の音が聞こえたといいます。以上の状況で、現在援助を中止しているので、もしCYKが避難民を援助するのなら、援助を再開したときに応えてほしいと、国内避難民援助の資金管理を担当するOXFAMから言われました。」

カンボジア全土で十数万人いる避難民のうち、新たに流出した避難民は、食糧、水もなく、緊急援助の必要性が高いと思われます。しかし、滞在が長引いている避難民には、各国民間団体からの援助が行きわたり、その地域に元々住む貧しい人びととの間にあつれきが生じています。このため、民間団体の中には、地域の人びとも含めた開発として、学校・病院建設を始めているところもあります。CYKも緊急援助が将来の活動につながるものであれば望ましいのですが、コンポントムでは今のところ可能性は低いと判断します。しかし、カンボジアでは緊急援助が求められ、事実必要とされる時があるので、今後CYKの方針と予算を明らかにしておきたいと思います。

牛車でコンポントムに逃げてきた避難民（92年3月）

カオイダンキャンプで聞いたカンボジアの話

上田広美

撮影／飯田照明

ある昼下がり。太陽が容赦なく赤土の大地を照りつけている。保育園に午後の子どもが来るまで、まだ時間がある。ひと寝入りしようと思ったものの、蠅がしつこく付きまとい眠らせてくれない。眠れないのにじっとしていても、よけいに暑さが耐えがたくなるだけだ。今まで横になっていた竹の縁台から降りると、当てもなくぶらぶらと歩き始めた。

この時間は、どこの家でも食事を終えてひと休みしているところで、辺りは気だるい静けさに包まれている。あちらこちらの日陰に、人型のおうとつをしたハンモックが揺れている。顔見知りの奥さんたちが、声をかけて食事をすすめてくれる。

「もう、お腹いっぱいだから。」

と、ありがたく辞退しつつ、大分汗をかいたので、ちょっと涼みたいなと思っていると、ひときわ高い子どもの声に呼ばれた。毎朝保育園に来ている男の子だ。今朝も、おやつにもらったバナナを大切そうに抱えて帰っていったっけ。いっしょに縁台に座っているのは、何度か言葉を交わしたことのあるおばあさんだ。

「この暑いのに、どこへ行くの。少し休んでいきなさい。」

と、席をすすめてくれるので、遠慮なくお邪魔することにした。動きを止めると、たちまちむっとする空気が、目に見えぬ膜となって身体にはりついてくる。

「お変わりありませんか。」

覆いかぶさってくる暑さを振り払おうと、声をかけてみた。何か話をしているほうが、気が紛れていいかもしれない。

「変わりないですよ。昨日も今日も、明日もずっと同じ。」

そう答えた小さな声の、何か捨て鉢な調子に思わず顔をあげて、あらためてその人を見つめなおした。孫ができてから、みなに「おばあさん」と呼ばれているし、今までの苦労のせいで老けてはいるが、多分、まだ50歳にはならないだろう。筋張った細い身体は、一見か弱そうに見えるけれど、重い水桶も運べば、薪割りもこなす。長い間、この熱帯の太陽の光にさらされてきた肌と節くれだった指は、働き者の証拠だ。

「おばあさん、生まれはどちら。」

不意に、目の前にいる人の過去を覗いてみたくなり、そう口走っ

ていた。昔のことは忘れたがって話さない人もいるから、もしかしたら答は返ってこないかもしれないと思いながら。

さっき呼び止めてくれた子どもは、おばあさんの脇で眠り込んでいた。あばあさんは、肩にかけていたクローマーを手に取ると、ゆっくりと、孫の顔をあおいでやった。そうして誰に向かうともなく静かに語り始めた。

「生まれは、コンポン・チナンでね。普通の農家ですよ。お米のほかに、とうもろこしと大豆を作っていました。小さい頃からずっと親や兄弟と一緒に野良に出ていたんです。

田植えと稲刈りの時がいちばん忙しい時でした。何しろ暑い土地ですから楽じゃありませんでしたよ。田植えのときは、足は水に浸かっているからまだ少しは涼しいけれど、稲刈りはかんかん照りのなかで、本当に辛かったですね。腰は痛くなるし、手は切り傷だらけでひりひりするし……。でも、村中、みな同じような暮らしでしたから、ほかの生活なんて考えたこともありませんでした。いずれは誰かと結婚して、両親の土地を分けてもらい、子どもを育て、年をとっていく……それが、今は、こうしてタイにいるなんてねえ。

17か18の頃でしたが、村に一人の男がやって来ましてね。バッタンバンの宝石採掘場で働く人を集めているというんです。村を離れるのは不安だったけれど、良い稼ぎになるという話だったので、同じ村の若者たちと行くことにしたんです。その頃、女の子が働く場所なんてなかったんですよ。

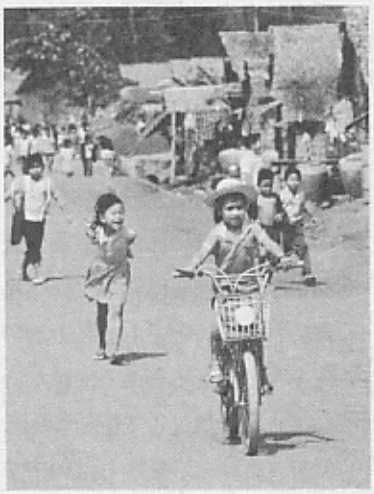
バッタンバンの宝石採掘場は、西洋人のものでした。私たちはフランス人て呼んでいたけど、さあ、どこの国の人だったんでしょうか。何しろ、クメール語（カンボジア語）しかわからないので、直接話をしたことなんてなかったんですよ。本当は、宝石を一つほしくってね。何という名前の石か知らないけれど、青や黄色の、それはきれいな石を毎日見ていたので、こんなにたくさんあるのなら、一つくらいくれないかしらと思って。でも、やはり、フランス人に頼んでみるだけの勇気がありませんでした。惜しいことをしたものです。

仕事はきつかったけれど、田畑にいるよりは変化があったし、若い人もたくさんいたから、結構楽しんでいました。映画や芝居が巡ってくることもあって、田舎では見たことがなかったので、すっかり病み付きになってしまい、毎回欠かさずに見に行ったものです。面白かったですよ。このキャンプの子どもは、今、ビデオを見ているけれど、昔はそんなものはありませんでしたからね。

それから、バッタンバンで、自転車に乗ることを覚えたんですよ。最初はこわかったけど、何度も転びながら練習してね。コツがのみこめたら、あんなに気持ちのいいものはありませんね。私の住んでいた辺りは、ゴム園が広がっていてね、その間の道を風をきって走っていくと、どんなに疲れた日でも、すうっと身体が軽くなるようでした。

そのうちに、同じ所で働いていた男性が、私を嫁にほしいと言ってきて、幸い両親も賛成してくれたので、バッタンバンで所帯を持つことになりました。思い出して懐かしいのは、ここまでですよ。その後は、夫に泣かされっぱなし、女の問題で苦労しました。ポルポト時代のことは、もう忘れたいんです。

今は、娘夫婦と暮らしているのです。共稼ぎなので、私が孫の世話をしているのです。私の夫は、アメリカに行ってしまいました。タイに来てから、また女ができてね。いい加減愛想が尽きたので、離婚したんですよ。娘がいっしょに暮らそうと言ってくれていましたしね。そうしたらしばらくして



撮影／飯田照明

あの人は、アメリカの定住面接に受かってしまったんです。その時の女と結婚してアメリカに行きました。もし別居だけで、籍だけはそのままにしていたら、今頃は私もアメリカにいたんです。

正直に言って、少し残念だけどこれが人生でしょうね。私はもう年だから、ここで一応食べる物に困らない生活ができれば、それでもいいんです。あの人には今の女のほうが合っているみたいだし、可愛い娘も生まれたし、写真を送ってきましたが、私といるより幸福そうですよ。時々、私に送金もしてくれます。少額ですけど。

先々のことは、あまり考えていません。考えるだけ無駄な気がしましてね。他の国に行きたいってがんばってみても受け入れてもらえるわけじゃないんだし、前の夫も向こうの暮らしは結構たいへんみたいだから、とても、私と娘の一家を呼び寄せるどころではないでしょう。私はここで配給を受けられて、生命の心配をしないですめば、それで満足なんです。

ただ、娘や孫の将来を考えるとかわいそうでなりません。孫は5歳になりましたが、生まれてからこの方、一度もキャンプの外へ出たことがありません。もちろん、カンボジアのことも何も知りません。自分の国はこのキャンプだと思っているでしょうよ。この子が大きくなる頃には内戦が終わって平和になっているでしょうか。

カンボジア人は決して残虐な民族ではないのに、どうしてこんな風に殺し合っているのでしょうね。カンボジアは豊かな国で、お米はよく取れるし、川には魚がたくさんいるし、ゴムの木はよく育つし、金も宝石も一杯ある。豊かだからほかの国がちょっかいを出してきて、それでこんな内戦になってしまったのでしょうか。

贅沢は言いません。戦争のない平和な暮らしをしたいんですよ。それだけが望みなのに……。」

低くかすれた声が途切れたとき、一陣の風が熱い空気の壁を揺り動かした。

私の脳裏には、一つの風景が鮮やかに浮かび上がった。まぶしい陽の光のなかを、日除けの赤いクローマーを頭に巻いた一人の少女が、自転車に乗って軽やかに走ってゆく。いつかどこかで見たような光景の不思議な懐かしさが、何故かいっぱいの悲しさを伴ってこみ上げてきて、しばらくの間、身動きすることすら忘れていた。

（上田広美 —— 1988年9月から1991年12月までカオイダンキャンプで活動。これは帰還が始まる前に聞いた話です。）

《編集後記》

今回は連載のない、変則的な会報になってしまいました。総会までに、カンボジアの活動の新しい情報をお伝えしたかったからです。カンボジアの活動も、帰還の動きも刻々変わる時期で、何回も原稿を書きなおすうちにまたしても遅くなってしまいました。次回はあまり間をあけずに発行したいと思っています。

カンボジアからファックスが届くたびに一喜一憂する毎日です。こういう気持ち、事務局だけではなく、会員の方とも共有したいと願っています。みなさんのご意見「会員登場」にお寄せください。（じゅん）